

〈翻字〉西郷隆盛夫妻の腹中之図

大庭卓也

キーワード 西郷隆盛、西南戦争、池田伝兵衛、明治錦絵

凡例

一、本稿では、本学御井図書館筑後文化資料室が所蔵する「西郷腹中之図」と「西郷隆盛妻腹中之図」（ともに大判二枚続）を解説する。これらは、明治十年十一月に大阪の絵草紙問屋池田伝兵衛から、一対で売り出された西南戦争物の錦絵である。絵と文章の作者名は記されていない。両図の趣向や構成については、近く発表予定の別稿に述べている。

一、生住昌大氏の調査によれば、これら二図にはそれぞれ次のような刷りが確認されると言う。

「西郷腹中之図」

イ 赤、黄、青、緑などの多色刷り、右下に出版編輯人として池田伝兵衛の名と明治十年十一月出版届出の記載があるものの。
ロ 赤、黄、青、緑などの多色刷り、池田の名、届出年月をも削除するもの。

ハ 色板を赤のみとし、池田の名、届出年月を削除するもの。

ニ 色板を赤のみとし、池田の名、届出年月を削除、背後いっぱいに書かれる文章を一切削除して「腹中も其それん悪は時たまおりにおのが悪よと代るしな魂」という狂歌を置くもの。

「西郷隆盛妻腹中之図」

ホ 赤、黄、青、緑などの多色刷り、左下に池田の名の記載があるもの。

ヘ 色板を赤のみとし、池田の名の記載があるもの。

本稿が底本とする御井図書館蔵の二図のうち、「西郷腹中之図」は右のハに該当する。「西郷隆盛妻腹中之図」のほうは、九色の多色刷りで池田の名の記載が無く、一見して新たな刷りのようだが、横の寸法がわずかに小さく、左端が数糎、池田の名もろとも手荒く断ち切られているようである。よってこれは、右のうちのホに当たるものと見ておく。

一、「西郷腹中之図」の全文翻字は、すでに『資料集 西南戦争 浮世絵』（平成三十年 海の見える杜美術館）で試みられているが、未読あるいは意味が通りづらい箇所が散見される。改めて解説を試みる所以である。

一、翻字は原文に忠実に行ったが、次の諸点は改めた。

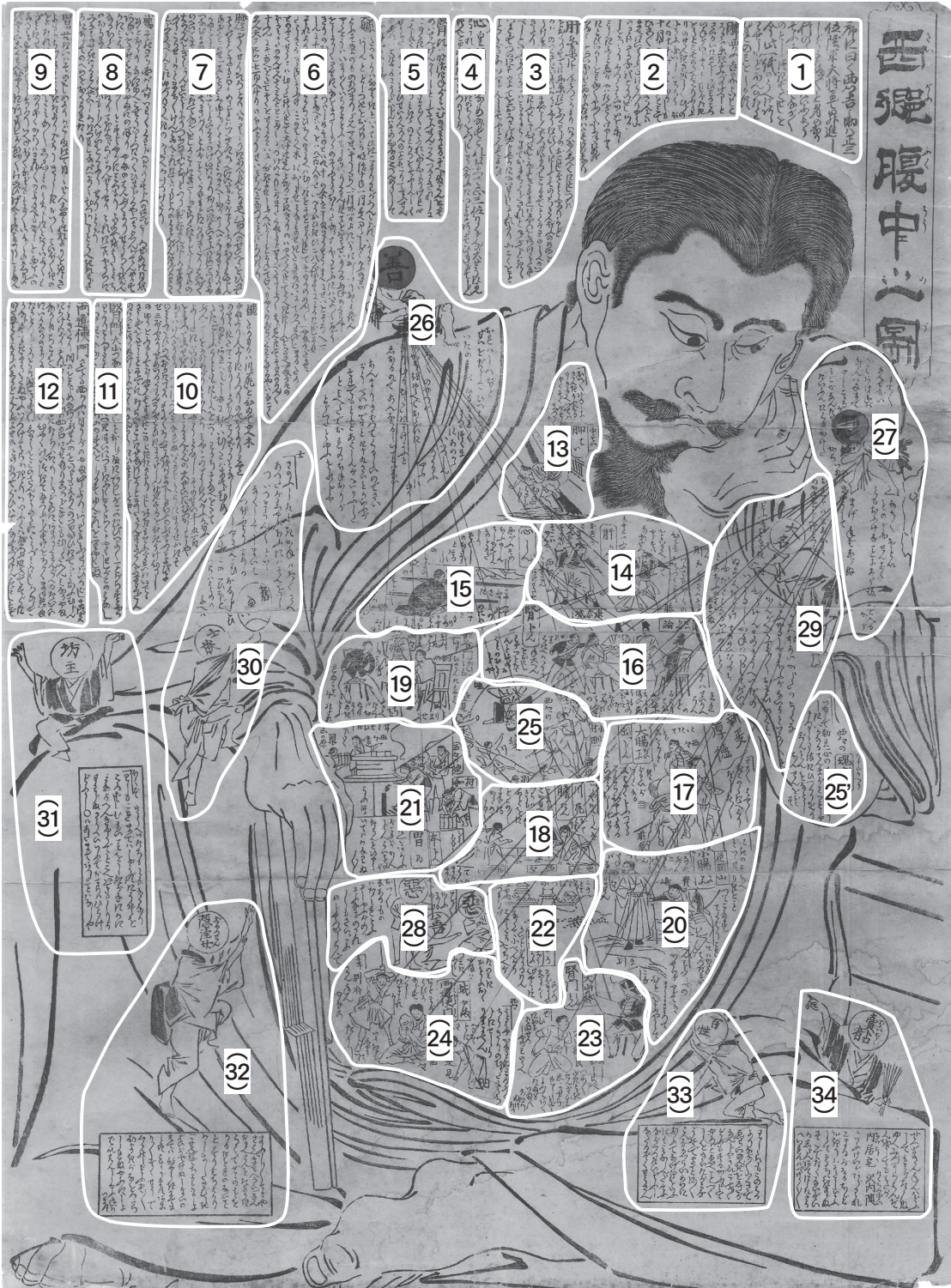
- ・漢字はすべて通行の字体に改めた。
- ・句読点、濁点を私に加えた。
- ・原文はほとんどが平仮名表記であるため、該当する漢字を適

宜傍書した。

- ・原文でわずかに使用されている漢字のうち、読み仮名を（ ）内に記して傍書した箇所がある。原文にはもともと平仮名で読み仮名が付されるものも若干あるので、（ ）内の読み仮名は、翻字者が加えたものと解されたい。
- ・人物名については、必要に応じて続けて（ ）内に一般的な名称を記した。
- ・誤記については、著しく読解を妨げる場合に限り、（ママ）と傍書し、直下に正確なあるいは正確と思われる表記を（ ）内に示した。
- ・脱字については、著しく読解を妨げる場合に限り、（ ）内にて補った。
- ・どうしても読めない箇所は、□で示した。推測したものを（ ）内に記して傍書したものもある。
- ・腹部に置く各コマ絵などにおける人物の台詞については、すべてにわたって冒頭に「へ」を付した。
- ・地口（諺や成句などに発音の似通った語句を当てて作りかえる言語遊戯）については、直下に（ ）内に説明した。
- ・「西郷隆盛妻腹中之図」の背後の文章には、内容の区切れ目に丸括弧開きに似た（印が何箇所か置かれている。本稿では丸括弧を多用するので、混同を避けるために、これら（印はすべて隅付き括弧開き【に代えた。

一、便宜上、「西郷腹中之図」は（1）と（34）に、「西郷隆盛妻腹中之図」は（1）と（22）の部分に分けて翻字することとし（各翻字の冒頭に示した翻字順序を参照）、併せて、それぞれの部分拡大図を提示した。

一、解説にあたっては、矢毛達之氏、生住昌大氏に種々お教え頂いた。私などには難読箇所が多く、武断的に読んだところも多い。ひとえに識者の教示をお願いする次第である。



○「西郷腹中之図」翻字順序

西郷腹中之図

(1)

序に曰く、西郷吉之助は、正三位陸軍大将まで昇進し、
議さまぐと、身のなり行のさまを、人たいふくちうぞふふに
見たて、ながくとしつぎすこせしを、今此一紙のうへに
あらわせしかど、ほんのたわむれのみをしるす。

(2)

肺 西がふ吉の介とい、しころ、さい京きよみづのげつし(僧
月照)と、さいかいにみをし、わがころのねがいじやう
じうしがたきをうとみ、そのうへ、ばくりふ(「ばくり」か)
よりのせんぎきびしく、ひらのじらふ(平野国臣)、白しいちらう
(白石正一郎)、ぼくの十すけ(大槻重助)らと、おりしも十月十
五夜のつきをみて、ひさぐのうつをはらさんと、はまべにいで、
ふねにうつり、やういのさけさかなをとりいだし、あるじをつく
り、心づくはいかいを樂しみしに、ふと西がふは、たんざく
(「つんざく」か)げつしやうにとびいりしを、みなく、やふく
小ぶねにあげ、いろくとかいほうし、西がふだけはたすかりし
なり。

(3)

肝 東京にしんぱつ。たかもり(西郷隆盛)は、かんなんしん
苦年つきをおくり、すでに西京にて、ふくわら(福原元圃)
のおこせしそをどふより、よどがはのいくさにおよび、かうしやう

たびくにして、そのち、さんぼふのめいをうけ、東京、しながは
までしんぱつす。よつて、こゝまでとくがわのしんかつ(勝海舟)
きたり、西がふのじんにふくし、申ひらきをなす。さすれば、
しろをあけわたすべしといふ。よつて、かつは、みよにちまでお
まちくだされとねがへど、きゝいれず、ついにそのよ、てをおろ
さず、すみやかにへいぜうし、それより北こくをことごとくおさ
め、がいじんし、そふもんす。よつ□、

(4)

心 皇朝きよかなめならず。これによつて、正三位りくさん
の大せうににんぜられ、なをくむにのちうをつくし、きんなんふ
いとまあらず。ひねもす、しんきんをやすめたてまつりしが、

(5)

腎 頃は明治四年、ぐわいむのきよたる、そへじま(副島種臣)
くんを、とくめいぜんけんかうしとして、てふせんこくへつかわ
されしに、このくにのくわんにんども、ことくくぶれいのみ
おかりければ、そへじまくんは、きてふのち、みきの
ことがらをそふもんし、くげうがたうちよりたまひ、せいかんろん
のことおこりて、てふせんのおれいをぎするに、うだいじん(岩
倉具視)は、そのひなるをべんめうして、このことやみしが、

(6)

大腸 たかもり(西郷隆盛)は、びやうきといひきこも
り、わがろんたゝず。いかゝわ(は)あらんと、としつきをお

(1)

希に曰く西の吉、卯の正三
 位陸軍大將並に外進一
 行の、人なみあらう
 今は一統の、人にならう
 今は一統の、人にならう
 今は一統の、人にならう

(2)

肺、西の吉の、卯の正三
 位陸軍大將並に外進一
 行の、人なみあらう
 今は一統の、人にならう
 今は一統の、人にならう
 今は一統の、人にならう

(3)

肝、西の吉の、卯の正三
 位陸軍大將並に外進一
 行の、人なみあらう
 今は一統の、人にならう
 今は一統の、人にならう
 今は一統の、人にならう

(4)

心、西の吉の、卯の正三
 位陸軍大將並に外進一
 行の、人なみあらう
 今は一統の、人にならう
 今は一統の、人にならう
 今は一統の、人にならう

(5)

腎、西の吉の、卯の正三
 位陸軍大將並に外進一
 行の、人なみあらう
 今は一統の、人にならう
 今は一統の、人にならう
 今は一統の、人にならう

くりしが、明治十年一月すへつかた、しがくかふのせいとふ、
 余者集製造庫らへ、一月卅一日よ、
 のよものあつまり、だんやくせいぞうぐらへ、
 にはかにおしいり、お多のだんやくをうばい、またく
 一両党打入官士手負入来船
 いちりよとふもうちいり、くわんしにてを
 おわせ、いりくるふね
 のくわんしをじよりくさせず、なをまた、
 しちうのそふどう
 大の方報道又市中騒動
 おかたならず。ほうどふには、いよく西がう、
 きりの(桐野
 利秋)、むらた(村田新八)、しのわら(篠原国幹)
 勢鹿児島田城前勢揃
 せい九千の余、かごしまきうぜうまへに
 せいをそろへ、一じんに
 千二百人、五うそなへ、さいろをば
 八百人のせいべうお(を)
 ひきひて、八つ代までにわかにおしよせ、
 それより、いくさを
 分肥筑境村田総将
 わかち、ひちくのさかへは、むらたを
 そをせうとして、そのよの
 めんく(は)山鹿高瀬田原坂吉次峠
 の(口)、やまが、たかせ、たわらざか、
 きちじとふげ、この
 薬植押寄南関高瀬田間合戦
 は、うへ木におしよせ、みなみのせき、
 たかせのあいにてかつせん
 はじまる。たかせのぞくせうには、
 むらた新八をして大げきせん
 となる。こゝに、きりのはゆふぐんを
 して、うへきにじんをかま
 へ、やまが、そのほか、みかたのなん
 せんすくわんと、ところ
 々々(山鹿)にかけめぐりしが、また、
 くまもとぜうは、たにしよく
 (谷干城)はじめとして、そのよのめん
 々々、十ぶん(分)にそなへを
 立て、ぞくをぜうぐわいにひきよせ、
 じぶんはよしと、かねて
 計略地雷火寄否黒煙魚
 けへりやくのじらいくわよせるやいな、
 こくゑん天ヲこがし、七
 百人(ばか)斗りのぼふとうぜい、みちん
 となつてとびちつたり。

(7)

胆(たん) ぞくせうたかもり(西郷隆盛)は、
 かまへ、八百人のせいへうをひいて、
 そのみをまもらしめ、われ
 はいくさにかんけいせざるがごとく、
 ちやぼう、はいじんなぞを
 よせ、ごるをかこみ、ゆうくくわん
 くとかまへしおりから、
 へいはしりきたり、いまくまもと
 ぜうぐわいに、じらいくわの
 計にかり、お大いにはいそふのよし
 をつぐるやいな、むまに
 そのまうちまたがり、とぶがごとく、
 くまもと(西郷)にまた、
 はいぼくのへいをまとめ、そなへを
 たてなをせしが、こゝにまた、
 篠原国幹(篠原国幹)は、しるせめ
 のはいぐんをき、
 安政橋井町押通無二三
 あんせい(橋井)より、つほいてふを
 おしとふり、むじむさんに、しる
 せめのくふう(橋井)をせしかど、
 ますくけん(橋井)ごゆへ、これにては
 うしろのくわんぐん(橋井)きつかわ
 しくと、ふちべ(淵辺高照)、へん
 見(辺見十郎太)にゆづり、うへきの
 かたへかけつたり。

(8)

小腸(せうじょう) そののち、西がふ(西郷隆盛)が
 いわく、くわじつより、
 数日(すうじつ)のあいだ、しるせめに日
 をひをおくり、なにゆへ、こぜう
 すじつ(すじつ)のあいだ、しるせめに日
 をひをおくり、なにゆへ、こぜう
 ひとつ(ひとつ)にかくひまどるや、
 いちゑん(一圓)がてんゆかず。あ
 ないをさせ、
 花岡山登半腹(はなおかやまのぼり、
 やまのはんぶくより、ぜうちうを
 がんか
 に見下(みくだし)、ところ々々(ところ
 々々)をすみやかに(みる)なり、よ
 こ
 手(て)をはたとうち(はたとうち)、
 なるほど、よくまもつたり、
 てきながらも
 かん(かん)せうせり。これにては、
 やうい(やうい)にはおちまじと、
 なをも

新計工夫しんけいをくふうせりとぞ。みなみのせきのくわんぜい、しろに
通じなば、いよくむづかすと、うへき、たわらざかに、あら
てのへいをおくられたり。

(9)

胃女たいは、そのはじめより、かごしまにて、日々、せん
じやうのたよりをきき、きよもかちいくさと、よきたよりばかり
きしに、おいしくはいぼく、きのをはたれ、けよふはかれと、
みなくしるひとのうちじにをき、いよく、わがみにせまり、
かくなりゆくからは、われくのよるべもなしと、西がふ(西郷
隆盛)のしつはじめ、みなくうちより、いへのぼくなども、
ともぐいろくのゑものをやういし、くわんぴやうにあたりし
が、おいしくけいびげんじうに、こまりしとなん。

(10)

膀胱 たかもり(西郷隆盛)は、川尻をひみて、やべ、木やま
より人よしにうつり、のべおかより、みやこのぜうにたてこもり、
しよほふへてくばりをなし、きりのとしあき(桐野利秋)は、か
ごしまにむかい、むらた(村田新八)は、ますだ(増田宋太郎)、
むめたに(梅谷安良)、ごとふ(後藤純平)らとともに、じんを
五つにわかち、そなへをたて、ぶんごじをかけめぐりた、かふた
り。みやこのぜうきんかふ、かぼふ、よしだには、いけべ吉十郎
(池辺吉十郎)をぶせうとなし、そのせい、千五百をもつて
ふせぎた、かふ。されども、くわんぐんの大ぜいにむづかすとや

おもいけん、たかもりはついに、へんみ(辺見十郎太)、なかしま
幾之丞(中嶋幾之丞)らにまかせおき、そのみ、ふたゝび、
のべおかにいたり、またくろふせふをかまへ、しよほふのふ
せふもよびよせ、三ぼふよりせめいるくわんぐん、きをひにまか
せしんげきするをひきうけ、ひつしのゆうをふるうてぼふせんす。
すでにこのとき、たかもり、としあきも、ぜふぐわいにいで、
さしずをせしと。すでに、た、かいかいもこゝにせまりしかど、また、
さんりよだん、よりよだんのあいをきりぬけ、どぶごくのさんちう
にひそみしとぞ。

(11)

賢門 大山綱良(大山綱良)は、ながくとおしらべにあ
りしが、このたびいよく、ことがらすみやか(すみやかに)わ
かり、もつともはくじやうにつき、ついにつみにふくし、こと
らくじやくせしが、このはなしのつゞきはながくしければ、西
がふ(西郷隆盛)のすへをしるすゆへ、これをりやくしぬ。

(12)

両道便門 さても西がふ(西郷隆盛)は、日うがのやまの中よ
りあらわれ、ふたゝびかごしまにすすみきたり。桐野(桐野利秋)
をはじめ、なあるぶせふのものども、はちくのいきおひにて、じう
おふむじんにかけめぐり、それより、しろ山の西の口にせまりし
かど、なをも、むらた(村田新八)、へんみ(辺見十郎太)、なが
やま(永山弥一郎)、なかしま(中島健彦)ら、こゝをせんとと、

ふせぎたゝかふたりしかど、めにあまるくわんぐんのたいせいにて、
 いかなるきよくわいたかもりも、ひやくけいつきて、べつぷしんすけ
 (別府晋介)をちかくまねき、いま、たかもり、じさつをすべし。
 さすれば、しきうを、このさんちうのたにうづみかくし、かなら
 ずかならず、てきにわたさぬやふいゝつけ、はらかきゝり、
 かいしやくは、べつぷをして、すぐにかたのごとくはからひしが
 ど、はくじよせしものあつて、くひはことなふ、じつけんすみし
 とぞ。

(13)

「肺 はい」「じゆすい」

へおいく、げつしよさん、きかふばかりさきへいては、やくそく
 がちがふ。まつたく。ヲ、イ。むねがくるしいくく。

(14)

「肝 かん」「東京城」

「肝」「勝」「西郷」

へ西ふさん、そふいふても、おゝくのひとも、おちつくところ
 を、こさへてやらすばなりません。

へじやといふても、おれがこゝまでしんばつするからは、そこ
 はかんをくり(くゝり)て(腹を括りて)の地口、こん、あけわた
 せ。

(15)

「心 しん」

へ西がふ、そのほふのしんちう、かんしんなものだ。きうばく
 のおりから、ところ々々のたゝかいはおさめ、なをく
 かんしんだ。

へさやふでムリ升。きみのためには、はいかんをくだき、
 こくゐのため、りやうどふのほか、くなふことじやムりません。

(16)

「腎 じん」「せいかん論」

へしれては、せいかんろんのことおこりて、公ぎやふうちより
 たまい、西がうもそのばにたちならび、いろく々とふせんのお
 れいのがめ。これよりくにへかへり、十年、大へんをおこし、
 わがいをたてんとつこのことのおこりや。

(17)

「大腸 だいてふ」「出しん」

「西郷」「前原」「新政厚徳」

へサアく、はやくひこのくにへくりだしたく。

へこゝにてとごをると、じきにぐわいがあしくなる。又はや
 くとふつても、これらびやふになる。ぐわいやうおしだせく。

(18)

「胆 たん」「川尻」

「池辺」「西郷」「桐野」

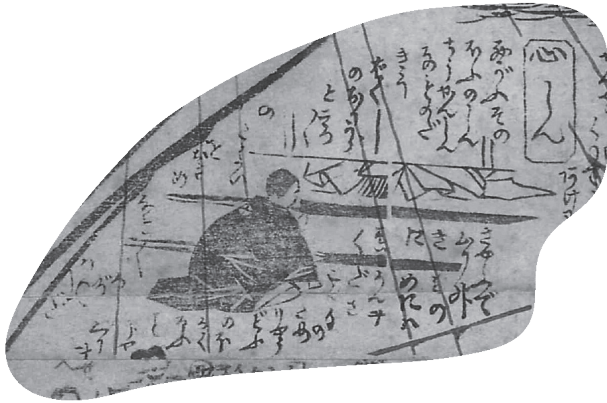
池へいゝや、かんしんなおてくばり。こゝにじんをかまへたか
 らは、きもふとをに、どこのくまで持かためたくく。



(14)



(13)



(15)



(16)



(18)



(17)

へでは、梅くいますまい。

(19)

「飲食門りういんもん」

「桐野」 「西郷」 「しのはら」

へむじむさんにみやこへとふりませう。

へどふしたか、こころがまよふ。

へみちをさへたらば、切ぬけうちぬき、とふれぬことは(こま)り升せぬ。

(20)

「小腸 せふてふ」 「花岡山」

「貴嶋」 「西郷」

西へてきのそなへといふ、せいきをもつてこなすてくばり。

これではかたひはづだわい。

きへなにぶん、上のきがいがいじ。ふんばつせねばなりませ

ん。

へへんみ、ふちべのかせいがやがてきましよ。よつて、ひとを

ふやしてこなしましよ。

(21)

「胃 ぬ」 「本じん」

「西郷の娘」 「桐野の妾」 「村田妻」 「西郷妻」 「しの原国女」

へサアく、せひ出したくく。

へシイくくく。

へなにであるふが、これがかんじん。肝心 くいものがたらんと、ひやうらふつては、かなわぬくく。

(22)

「膀胱 ぼうかふ」 「延おか」

へこのところで、ひつしのじやうのつもりが、こふもよひちへ

がなくて、小べんがちかいとこまる。りんびやうになつて、かく

るがましである。

(23)

「腎門 じんもん」 「大山の終」

「大山綱良」

へおやまつなよし、せんだつてのおしらべ、いよくゆきと

き、だんざいにしよせられしとぞ。よつて、あくだまもいまは

ちからぬけたり。

へせひにおよばぬ、せつしやのみのうへ。

(24)

「両道便門」 「城やま」

「逸見」 「西郷」 「別府」

西郷へこと、はやかなわぬ。わがふくちう、きりの、むらたも

うちじにせしか。りよべん、しんのそとにきへゆくあと、わがくび、

かならずかくしたまはれかし。

へチエ、ざんねんやなあ。いかにもしやうちいたしたり。

(20)



(19)



(21)



(22)



(23)



(24)



(25) 「西郷の魂変り」

「永山」「村田」「淵辺」「池上」「別府」「逸見」

「哇」

(25)

「西郷の魂変り」

「いま」で勤王一心のたましいなりに、いかなるてんまが
みいれしや、まつさかさまにひつくりかへり、じんもんをなどし、
ほんせんをおこす。

(26)

「善」

「おれは、よつほどせいをだしてひつばつていたのに、ひもが
されくさつてつぐまに、あのかたはいつしんがくるふやうになり、
いろくくのやつがちからをそへて、おゝぜいになり、むりむたい
にまげよふとしおるので、こんなくるしいことはない。

「あんまりきばつてくるしいので、さいごうべいがでると四十
九さい」(「最後尻が出る」と始終臭い)の地口)とかいふが、それ
でも、どぶどもあくしんがへいかふしたとみへたで、おれのほね
おりがといたとゆふものじや。

(27)

「悪」

「までく、なんでもいのみあはねばならん。いままで、やゝ

ころがうごかなんだが、だいぶんにくるいかけたから、いま
べんきやうして、まげねばならぬ。

「なかくおもいものじや。ぜんあくとも、おふけなことに
あたまを入るから。」

(28)

「たのみにおもふおゝやまはつみにふくし、
「ソレ」かふなるうへは、のいたく。

「おい」。なあるものはたうれ、どぶぞしやふがありそふな
もの。われくもさいごふ(「西郷」の地口)のじせつかしら
て。

(29)

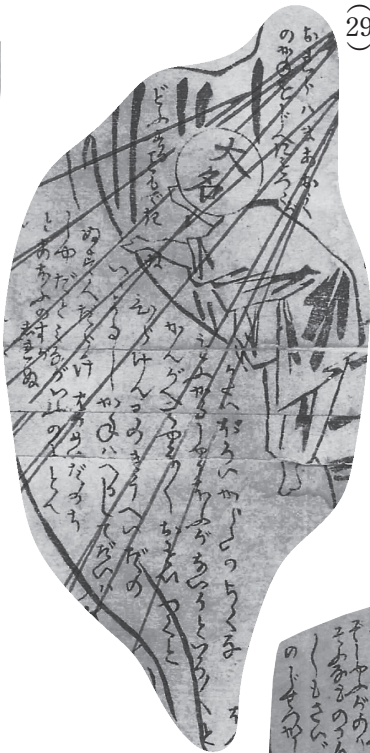
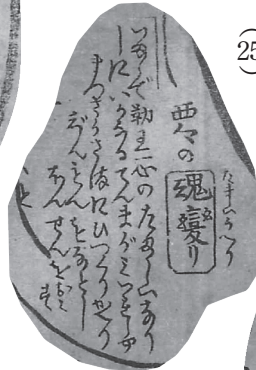
「大名」

「おれらはまあ、おゝくのかねをじんにもつたが、どぶするこ
ともできぬ。かたい、ぼろい、からだのらくな、もふかるしやう
ほふがないかと、いろくくとかんがへて、やうくおもひつくと、
ひらけんだの、きうへいだのいゝよるし、かねはへるし、てだい
はぬす人だらけ、はつめいだの、ちしやだとみながいふのに、と
んとあほふのずがしれぬ。

(30)

「士族」「旧へい」

「士」のふしたとき、かねはたくさんあつたが、しやふほふに
はそんをし、ついつまらんくといゝ、なくしてしまい、はつぽふ



よりせめるしやきんこひ、おなじこひでも、このこひほどつらいものはねへは。

(31)

「坊主」

ぼうずへきうへいたちもみななくなり、わしもこれまでは、じやうずいそをころぼし、むまいことをしたが、なにかに、みながべんきやうで、どこへいてもしりがすわらぬ。きうへいいふて、おてらはひらけどふし。○はあたまで、あつたことはなしや。

(32)

「隠淫女」

へまふしく、そりやきこへません、さいごさん。おまへさんをたよりに、らくで、ぜゝのもをかる、たをれないことと、すりばちばかりかしました。きびしきごせんぎで、ちよともしよばいがでけぬ。しまいののはては、びやうきにて、まことにこまります。あまりく、ぞくせうでムリ升。どふぞく、びよきがなをつたら、しれぬやふにしよばいはんじやふねがいま

(33)

「百姓」

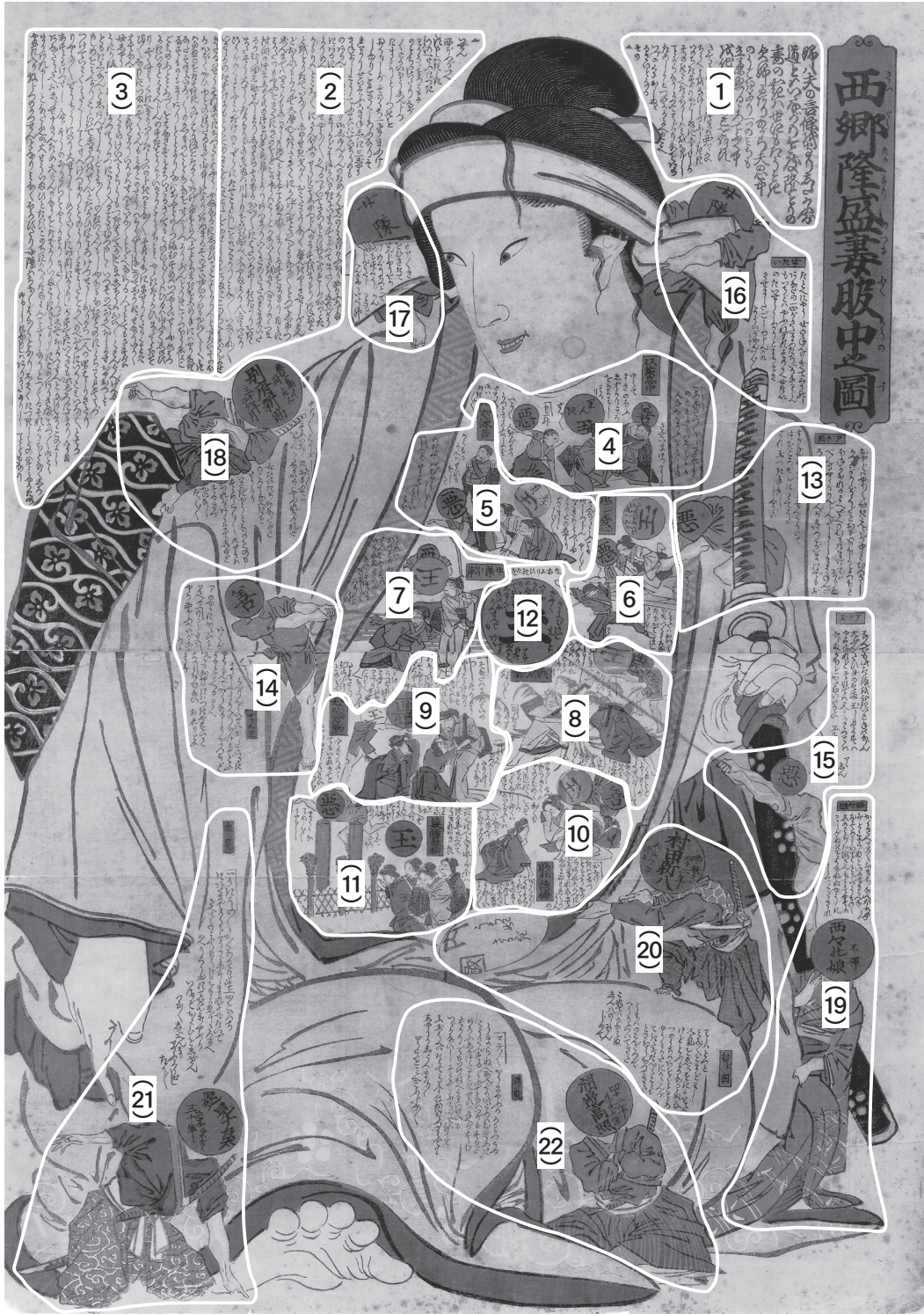
へわしらも、このはるよりながくいくさで、ゑらいなんぎをしたが、なんじや、さいごふがくどふもする、かふもしてやろと、ゑへことづくしをきいたが、みなうそで、まことにく、こ

んなゑらいめいにおふて、なげきをいふにも、みなしんだそふなが、いつたいどふしなざる、ぞくせうさん。

(34)

「売占者」

へせつも、きんねんはどふしてもみがたぬゆへ、みづからはんだんをしてもみだが、内居宅、沢内随トいふけいがあらわれこまるが、なるほどかぎり□わたし、そふしても、うちはきまらぬ。そこでたくなはずいかしらん。あてにしたきうへいれんは、



○「西郷隆盛妻腹中之図」翻字順序

西郷隆盛 妻 服中之図

(1)

婦は、夫の言条を守り、したがふが道とはいゝながら、今度、隆もり（西郷隆盛）の妻の如きは、世にもたうとき貞婦にありながら、夫の心中のうごきより、一つのみちも立兼ねぬ。よつて、ふく中を他けんするのみをあらはす。

さて、たかもりがつまは、西郷、かいちうへみをなげしが、ふしぎにいのちたすかり、かごしまにじうせしが、そのきこへたかかりしは、みをなげしことからなり。よつては、なをあらためしかど、ついにかみへきこへ、いづのくにおゝしまにるざいとなる。その

(2)

いぜん、西がふ（西郷隆盛）がいへにかしづきしに、かのいせふに付き、わがみももるともそのとちにいたり、ながくの介抱、しんじつにまもり、としつきをおくりしが、そのうち一子ヲまふけしなり。これきくじろふ（西郷菊次郎）なり。それより、せいそふかさねしに、三じやうさねよし（三条実美）こう、てふていにせいちうのものあらんか、そのよ、万事御じゆんらんのため、ちくぜんのくにげかふ（の）おり、西がふ、大しまにあるにより、つかいを（たて）其つかい、さきにいたらず。よつて、またくしまづかうより、めんぜうをもたせ、やうくかへる。つゞいて、さいもよびむかへられしが、おつとたかもり

は、ところ々々にさんぼふのせうとしてしゆつじんのるすをまもり、あねおとをもりたて、いろくしゆせき、文がく、おこたわりなくべんきやうさせしが、こんどおもいもよらず、大へんをき、さそくにかんげんすといへども、なかくもつて、しゆつ

じんまでは、いさゝかもしらざりしゆへ、もはやことおくれしまゝるすをまもり、日々にかたの味方模倣、きやうはこゝと、かちいくさをき、【きりの（桐野利秋）】つま、

村田（村田新八）のつま、しのはら（篠原国幹）のつまむすめ、日々よりあつまり、いくさのさたのみまちいたるが、むら田三助（村田三助）せんしより、しのはらそのほか、おいくに、はたいろあしきたよりをき、また、そう大せうたかもりどのも、いまは川じりをひき、【やべ、木やまより人吉にいたり、ひうがのくにみやこがだけのこぜうにたてこもりしをきくより、みなく、いま、われく、いさゝかのたすけにもと、くにのくわんぐんにあだをなせしかど、いまにこのちへも、大ぐんよせ

(3)

きたるはせう、それまでにちつともはやう、やまなかしのび、ことをはからんと、女たいそのほか、かぼく、かひ、小ものいたるまで、山中によりあつまる。そのせい、女ながらもかひくしく、みには白ぬのをたすきかけ、はかまをたかくあげ、白めんにてはちまきをしめ、手にはやり、なぎなた、そのよ、いろくのゑものをもち、なを、せんじつよりぶんどりせし、てつぼう

所^持しよ^じな^すも^のも、ま^ゝあ^り。も^とよ^り、な^にお^ふも^のゝつ^まむ^すめ^は、い^つや^うい^せし^や、六^はつ^ごみ^のふ^とこ^ろづ^ゝを、は^なさ^ずも^ちい^たる。さ^ても、こ^のひ^とぐ^ゝは、ひ^るは^山ふ^かく^しの^夜、よ^にい^ると、く^わん^じん^のす^きを^うか^ゝい、き^りこ^みう^ちこ^み、や^ゝに^たゝか^ひ、ま^たと^きを^り、ぞ^くせ^う、く^にへ^きり^いり、^戦た^ゝか^いの^とき^は、み^なく^ゝそ^のう^ちに^ませ^り(^{ママ})、は^たら^くこ^とた^びく^ゝな^りし^に、い^まは^ぞく^ぐん^も、み^やこ^のぜ^うは^らく^ぜう^なし、【^のべ^おか^にせ^まり、い^よく^ゝは^てな^んも^よふ^ぶり^をき^くよ^り、い^かゝ^はせ^んと、い^ろく^ゝも^だへ、な^ある^人々^とても、さ^ずが^は女^しや^う、も^とよ^り、く^わい^けい、へ^うら^うも^つき^はて、【^かご^しま^しち^うは、お^いく^ゝ、く^わん^ぐん^げん^じう^にか^まへ^られ^しよ^つて、う^かつ^にき^り入^るこ^とも^むづ^かし^く、い^つそ^のべ^おか^へお^しよ^せ、お^や、お^つと^ゝも^にし^なん^とし^あん^せし^かど、み^ちく^ゝの^たい^ぐん、も^しや^なも^なき^もの^にと^らわ^れて、は^づか^しめ^をみ^んよ^り、こ^ゝに^てじ^さつ^をせ^んと、た^がひ^にこ^ゝろ^けつ^せし^おり^から、一^人の^男は^しり^きた^りつ^けて^いわ^く、わ^たし^こし^こと、せ^んげ^つよ^り、も^のう^りと^すが^たを^かへ、^のべ^おか^にい^りこ^み、い^ろく^ゝと^はか^り、や^うく^ゝ、ぜ^うち^うに^いり、大^せう^はじ^め、か^たく^ゝに^御目^にか^ゝり^しが、す^でに^いく^さも^此し^ろに^せま^り、今^日あ^すと^もけ^つせ^し命^すう^のお^りか^ら、も^やう^かわ^り、^{また}く^ゝう^つて^いで、お^ゝか^つせ^んと^なり^しま^ゝ、こ^のよ^し、^あな^たが^たへ^おし^らせ^申さ^んた^め、大^ぐん^のな^かを^たば^かり、い^ま

こ^ゝに^きた^りし^に、こ^のあ^りさ^ま。ま^つく^ゝ、御^とま^りあ^れか^しと^なだ^め、御^大せ^う、い^まひ^とた^び、こ^のち^にか^へり^たま^わん^こと、ぜ^うな^りと^つぐ^る。そ^れよ^りほ^どな^く、し^ろや^まに^入り、^数じ^つの^かつ^せん^とな^り、み^なく^ゝほ^ろび^たり。女^隊は、ち^かぐ^ばら^くと^なり、ほ^ぼく^につ^きし^もは^すみ^やか^に御^ゆる^しに^なり^しは、あ^りが^たか^りし^こと^ども^なり。

(4)

「以前の心中」

「善」「りんぎ玉」「悪」

「あなたはく、いづの大しまのときより、いろく^ゝと^{かん}なん^くろ^ふは、わ^たし^にさ^せ、い^ま、け^つか^うと^ゆう^て、す^きの^ほふ^ゑ(は^うへ)ば^かり、こ^ゝろ^をか^よわ^し、わ^かり^せん^{(わ}かり^んせん)く。

「申上^升。い^よく、人^きが^より、ち^つと^も早^う御^しつ^ば。

サアくく、御^いそ^ぎくく。

(5)

「門出ノ諫言」

「貞孝玉」「悪」

「そんなら、どふでも御^しつ^じん。や^ゝく^ゝ、い^くさ^はど^ふじ^や。み^かた^のし^やう^り。い^さま^しく^くく。

「へかくなるうへは、ぜ^ひも^なしと。

「へめだてはむやうくく。

「じやというて。」

「くといわい。」

(6)

「忠シン変心」

「てんどふして、きがわりの玉」

「悪」 「みかたは、おい／＼かちいくさ。あなたもおでまし。サア

くく。

(7)

「女隊ノ出陣」

「悪」 「玉」

「とはい、おつとのほんせん。こふしてはいられぬ。ぜひが

ない。どこまでも。

「さよう／＼ムリ／＼」

「アレ／＼、らつばのおと。さア、こふしてわいらもこのうへ、

女ながら今ひとはたらき。つゞけ、ものども。

(8)

「戦地ノ働」

「悪」 「玉」

「くまもとより日／＼がじへ、せいでして、なんでも、おつとの

たすけをせねばならん／＼。

「われも、ちからのかぎり、どこまでも。」

「かふなるからは、たれかれのよふしやはない。すゝんだ

くく。

「ひゞきわたる、アノ大ほふ。」

(9)

「恩あいの心ノ動」

「善・悪」 「玉」 「玉」

「かゝさん、なつかしうムリ／＼升わいなう。」

「そなたは、まめでいやつたか。かうゆうことになりゆくしも、

そなたはなんにもしらぬこと。神ほとけをしんじんして、命を

たもつやうにしや。

「今さらいうても、いかぬ。きをとりなをし、はたらいた

くく。

(10)

「前非後悔」

「善」 「玉」

「ヤア／＼、そんならきりの(桐野利秋)どのはじめ、みなく

も、うちじにう(うちじに)をぞせられしか。かくなりゆくは、

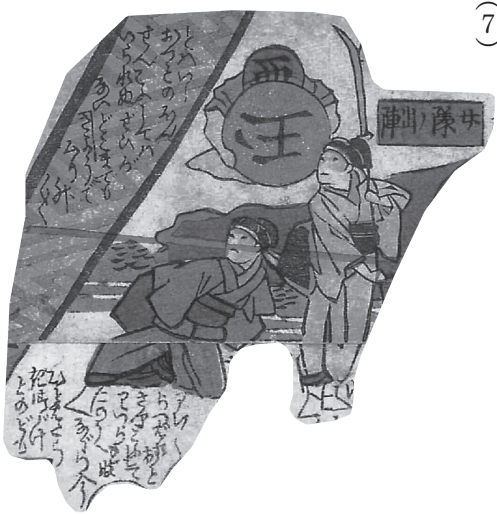
かねてのかくがふとはい／＼ながら、さんねんナわいなア／＼。

「おなげきは、ごちつとも(ごもつとも)。さりながら、あの

大ぐんにとりまかれ、しよせんかなわぬ、われ／＼がうんぬい。

「きく二郎(西郷菊次郎)ことも、とらわれても、そのまゝ御

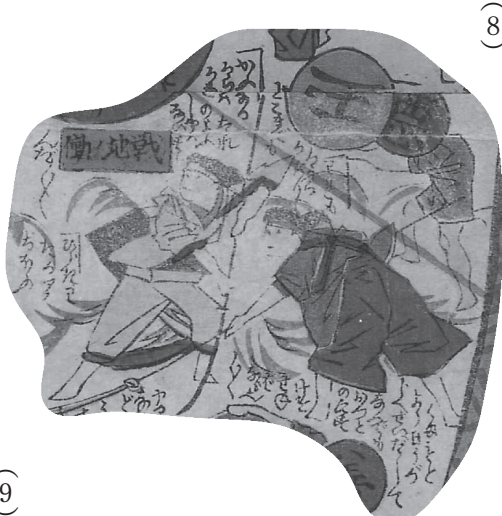
ゆるしになつたとは、まア、うれしいこと／＼。



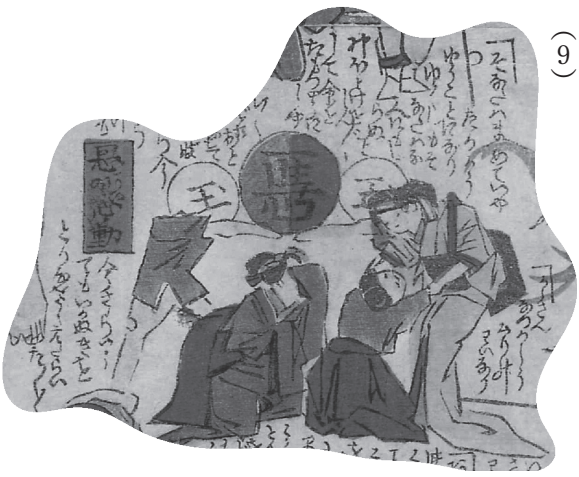
(7)



(6)



(8)



(9)



(10)

(11)

「墓碑参詣」

「玉」「悪」

「悪」^{悪人}「玉」^言
へあくにんといわれしが、今はつるまできついでくだされ、あ
りがたいこと。これをおもへば、早ふにころをとりなをし、ど
ふともしやうがあつたであらう。

へまうかなわぬくく。イヤアく。

(12)

左右より、ひきたをす。

きみへむかいし、ぎやくせんといながら、日々のしやうり。
これでは、わしもしつじんせねばならん。ぜんでも、あくでも、
おつとのたわけ。

(13)

「悪」「アク玉」

「悪」^親「アク玉」^余
へおやじはやうくひきこんだが、中々むづかしかつたが、か
はらくだと、おもいのほか、よつほどほねがおれるわへ。ぜん
ひもにまけてはならぬ。べんきやうがかんじんだ。しかし、
きよねんごろなら、玉つきさんが、まゝあつたが、いまにでもお
すきなおひとは、一じ十せんぐらいで、つきころばしにきてくだ
され。玉つき手なし（騙すに手無し）の地口）じやわい。
へ御ちうしんく

(14)

「善」「ぜん玉」

「善」^金「ぜん玉」^際
へこんりんざい、せい出しているに、またしてもかへりかける。
どふゆうもんで、かうなるしらん。よつほどあくがよるとみへる
わへ。アのやうにかたいものでも、おやじにはつきやすいと見へ
る。

へウンとせい。

へ□□□

へとほむない。おれがどふやら、西がふべい（「最後尻」の地
口）が出□□さうな。ウ□□。

(15)

「悪」「アク玉」

「悪」^何「アク玉」^玉
へなんでも、此たまをひきいれねばならん。大ぶんかたひ女
のたま。玉しすかすは、やすけれど、それでは又々かわつてはな
らぬ。よほどかたむいたわい。エイくくく。ア、しんど。

(16)

「女隊」「女たい」

「女隊」^隊「女たい」^隊
へたとへにゆう、女のねんりきでムリ升。あなたの一心が
さだまつたら、いかなるじんも、いちどはやぶれます。そのうへ、
女たいのたいせう、しつかりとはちまきさせました。ごしつじん
の御よういが、かんじんくく。

